

七月のテーマ  
喜働



え・小島サエキチ

# 生涯現役の秘訣

**か**

つて、日本プロゴルフ界のドンと呼ばれたプロゴルファーがいました。杉原輝雄氏です。約五十年にわたり現役を続けて、プロ通算六十三勝の記録を打ちたてました。身長一六二センチと小柄な体格でしたが、不屈の闘志と粘り強さは、プロ仲間内でも一目置かれる存在でした。

貧乏な幼少時代を過ごした杉原氏は、小学校高学年の頃から、近所のゴルフ場でアルバイトを始めました。経済的な理由で進学をあきらめざるを得ない中、アルバイトを続けながら、プロゴルフアームを目指したのです。

昭和三十二年、二十歳でプロ試験に合格。身体が小さかった杉原プロが、試合に出場し続けて勝利を重ねていくには、体力をつけるしかありません。当時は、科学的な練習方法なども乏しく、ずいぶん無理なトレーニングも行なったそうです。身体はボロボロになっていったそうですが、一試合一試合を命がけで臨み、クラブを握り続けました。

そんな杉原氏は、「人は皆、生まれた時から、人間のプロになるという使命を担っている」という言葉を残しています。そして、人間のプロになるために必要なのは、特別な修行ではなく、「感謝」や「思いやり」などの心を持つことが大事だ、と語っています。

自分が生かされていること、働きの場があること、働きを通して誰かに感動を与えられること、そうしたことへの「感謝」があるかどうかによって、人生のあり方は大きく変わってくるのでしょうか。

自分の只今就いている仕事の尊さを悟って、けんめいに働く時、自然に与えられる楽しみ、これは何物にも替えることの出来ない人生の喜びである、最高至上の歓喜である。

これは倫理運動の創始者・丸山敏雄の言葉です。自分に与えられた仕事の尊さを知り、一所懸命にその時その場でベストを尽くすことこそ、人生の喜びであり、歓喜である。それはまた、健康の秘訣でもあり、おのずと、地位も名誉もついてくる——と『万人幸福の

葉』の中で説いています。

プロゴルフファーとしての働きのあることに、常に感謝を忘れなかつた杉原氏。どんな取材にも丁寧に応え、グリーンの芝生を手入れする裏方の苦勞にも敬意を払い、感謝の気持ちを持っていたといえます。

六十歳でガンの告知を受けたあとも、手術ではなく、薬での治療を選択し、生涯現役を宣言。二〇〇六年の「つるやオープン」では六十八歳で最年長予選通過記録を、二〇一〇年の「中日クラウンズ」では同一大会五十二年連続出場という世界記録を樹立しました。

働く喜びは、人生幸福の原動力です。どのような職業でも、与えられた仕事を通して自分を磨き、自らを生かす場があることへの感謝を忘れず、今就いている仕事の尊さを自覚できた時、真の意味での真心の働きとなるのでしょうか。今日も一日、朗らかに安らかに喜んで進んで働きましょう。

参考資料：『今を生きるーわたしの見方・考え方』月刊『PHP』二〇〇八年一月号